

中美研会報 No. 149

2025.3.1 中越美術教育研究会 事務局／長岡市豊詰町227 長岡市立上組小学校 〒940-1142 ☎(0258)22-0959

今年度の活動を振り返って

中越美術教育研究会 会長
村山 裕之



学びの主体は「子ども」です。私たち学校・園の教職員は、子どもたちがワクワクするようなフィールドに導く必要があります。そのため学びを広げたり深めたりする手立てについての研修会や子どもの絵から学びを深める教育美術展等、様々な造形美術教育の振興を目指して運営してまいりました。

今年度、特筆すべきは、何とんでも8月に行われた「新潟県美術教育連盟研究大会 兼 第57回夏季研修会」です。昨年度のプレ大会を経て、会場を見附市文化ホールアルカディアに移して開催いたしました。ここまで研究部が中心となって企画し、下村副会長が見附市教育委員会と何度もかけあい会場を確保し、そして会員総出で準備・運営にあたっていただきました。

当日は上・中・下越の各地区から多数の参加者が訪れてくれました。『TSUNAGU～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～』をテーマに授業の実践発表、ポスターセッション「造形五・十の市」、新潟県出身の若手アーティストによるパネルディスカッションの三部構成で研修を進め、新たに参加者の皆様とも、つながる機会をもち、これからの図工・美術教育について語り合えた研修会となりました。

11月の関プロ茨城大会では、当会の会員である若手の山本啓亮教諭が、紙コップという身近な素材とニットの端切れといった地域素材を活用した造形遊びの実践例を発表しました。実践からは、シンプルな素材だからこそ広がる子どもたちの創造の世界や自分の領域から他者の領域へと合流して影響し合う姿が見られました。素材とつながり、他者ともつながることで「感性を働かせ」「つくりだす喜びを味わい」「基礎的な能力を培い」「豊かな情操を養う」というねらいが体現された実践でした。

第60回中越教育美術展の募集には、県内各地から17,316点の作品応募がありました。審査員には、昨年度から継続の新潟大学 田中咲子 教授、今回で2度目の東京造形大学 山田 猛 教授、今回初審査の東京家政大学 岡田京子 教授をお迎えしました。第一次審査会では3名の大学教授に審査していただくため、子どもたちの絵の隅々まで見て、作者の思いを取りこぼさないように丁寧に審査しました。第二次審査会では、それぞれの先生方が作品に顔を近づけたり、画用紙の裏面に描かれた下書きの線や題名、落書きにも目を通したりしながら作者の思いを懸命に探る真摯な姿が見られました。私たちが一次審査で選んだ作品に対して、具体的にその「よさ」を説明していただき、得難い貴重な研修の場となりました。

1月には長岡市美術センターを会場に展覧会を開催し、特別賞49点と特選519点の計568点が飾られました。作品解説会も行い、魅力あふれる作品の数々を、より深く鑑賞してもらうことができたことは喜ばしいことでした。中でも、来場していた受賞者本人から作品の説明を受けることができた時は、私たちの想像を超えるドラマやストーリーを聴くことができ、あらためて子どもの絵の魅力を実感できました。

本来2月に開催される教職員美術展ですが、出品者からの要望もあり、来年度の春開催とすることにしました。現在、出品募集中ですので、力作が揃うことを楽しみにしております。

3月には「中越教育美術展作品集 第34集」を刊行し、この「会報」を発行しました。

会員の皆様のご尽力のお陰で、充実した取組ができましたことに、心からお礼申し上げます。

事業の開催に対し、新潟県教育委員会や長岡市教育委員会、見附市教育委員会からのご後援、また新潟日报社、報道機関各社、新潟県教職員厚生財団、日本教育公務員弘済会新潟支部よりご援助をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

令和6年度 中越美術教育研究会 事業内容

- 第1回 理事会
 - ・令和6年5月14日(火) 上組小学校
 - 会務決算報告・予算事業計画審議等
- 第57回 夏季研修会
 - (第35回 新潟県美術教育連盟研究大会)
 - 「TSUNAGU」学びをつなぐ図工・美術教育の可能性
 - ・令和6年8月5日(月)
 - 見附市文化ホールアルカディア
- 第1回 美術振興部会
 - (中美展委員会・広報委員会)
 - ・令和6年8月27日(火) 上組小学校
 - 審査会計画・作品集・会報原稿依頼等
- 第63回 関東甲信越静地区造形教育研究大会 茨城大会
 - ・令和6年11月15日(金)
 - 発表者：見附市立見附小学校 山本啓亮
 - 司会者：長岡市立川崎小学校 堀 和宏
 - 助言者：見附市立見附第二小学校 下村芳明
 - 記録者：三条市立旭小学校 鰐淵紀美子
- 中美展一次審査会
 - ・令和6年11月21日(木) 上組小学校
 - 審査員35名
- 第2回 中美展委員会
 - ・令和6年11月21日(木) 上組小学校
 - 展示・解説会等計画
- 中美展二次審査会
 - ・令和6年11月29日(金) 上組小学校
 - 東京学芸大学 教授 山田 猛 様
 - 東京家政大学 教授 岡田 京子 様
 - 新潟大学 教授 田中 咲子 様
- 第2回 広報委員会
 - ・令和6年11月29日(金) 上組小学校
 - 中美作品集計画
- 「第60回 新潟県中越教育美術展」
 - ・会期 令和7年1月10日(金)～13日(月祝)
 - 長岡市美術センター (中央図書館)
 - ・1月13日(月祝)作品解説会
- 第3回 広報委員会
 - ・令和7年1月29日(水) 上組小学校
 - 中美作品集の校正
- 第4回 広報委員会
 - ・令和7年2月14日(金) 上組小学校
 - 中美作品集の校正
- 役員会
 - ・令和7年2月27日(木) 上組小学校
 - 各事業の反省と次年度への提言
- 「第60回 新潟県中越教育美術展・作品集」刊行
 - ・作品集 第34集 発行
 - ・中美研会報 149号 発行

第57回 夏季研修会(第35回 新潟県美術教育連盟研究大会) 報告

「TSUNAGU」～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～

研究部長 長岡市立川崎小学校 堀 和宏

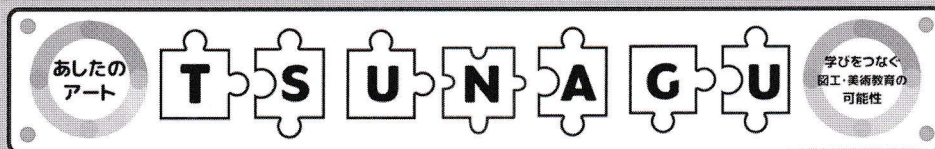


1 大会の概要

第35回 新潟県美術教育連盟 研究大会 兼 第57回 中越美術教育研究会 夏季研修会

「TSUNAGU」

～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～



- ◆ **主催** 新潟県美術教育連盟 ◆ **主管** 中越美術教育研究会
- ◆ **共催** 見附市教育委員会
上越美術教育連盟 下越美術教育研究会 高等学校教育研究会芸術部会
- ◆ **後援** 新潟県教育委員会 新潟県教職員厚生財団 日本教育公務員弘済会新潟支部
新潟日报社 NHK 新潟放送局 BSN 新潟放送 NST 新潟総合テレビ
Teny テレビ新潟 UX 新潟テレビ21 NCT

◆ **大会テーマ** 「TSUNAGU」～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～

◆ **日時** 令和6年8月5日(月) 13:00～16:40

12:40	13:00	13:10	13:15	14:00	14:10	15:10	15:20	16:30	16:40
受付	開会式 【大ホール】		1時間目 実践発表 【大ホール】		2時間目 造形五・十の市 【ホワイエ】		3時間目 パネルディスカッション 【大ホール】		閉会式 【大ホール】

◆ **会場** 見附市文化ホールアルカディア(大ホール, ホワイエ)

- ◆ **来賓** 上越美術教育連盟 会長 大塚 啓 様 (上越市立柿崎中学校)
下越美術教育研究会 会長 渡邊 敏尚 様 (新潟市立金津小学校)
高等学校教育研究会芸術部会 部長 小堺さとみ 様 (県立三条東高等学校)

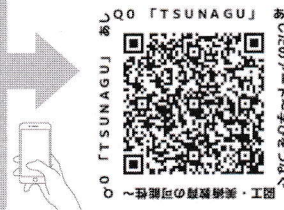
◆ パネリスト

日本画家 本田 貴哉 様
現代美術家 今井 翔太 様
廃材再生師 加治 聖哉 様

3時間目「参加型パネルディスカッション」の練習をしよう!

開会式までの待ち時間や
休憩時間に
右のQRコードから
質問に回答してみましょう

今日も暑いですね!
「今、食べたいものは?」



2 参加者 101名（県内小中特支学校教職員，高等学校教職員，保育園・幼稚園・子ども園教職員，一般参加者）

3 大会テーマ

「TSUNAGU～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～」をテーマに，学校や園における図画工作・美術科の学びを様々な「ひと・もの・こと」とつなげ，学びの広がり・深まりや循環を創出するための手立てや方策について，参加者とともに考えました。

「TSUNAGU」

～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～

あしたの
アート

T S U N A G U

学びをつなぐ
図工・美術教育の
可能性

「自分」で考え，「自分」で決め，「自分」でつくりあげる。
 図工・美術の授業には，現在・未来の「自分をつくる」ための学びがたくさん詰まっています。「学び」は，多様な他者をつなぎ，影響を受け合うことで，見方や考え方が広がり，深まっていきます。

本大会では，「TSUNAGU」をテーマとし，学校や園における図工・美術科の学びを様々な「ひと・もの・こと」とつなげ，学びの広がり・深まりや循環を創出するための手立てや方策について，参加者全員で考えます。

本日举行実践発表や造形五・十の市，パネルディスカッションでも「〇〇をつなぐ，つながる」という視点を大切にします。参会者同士もつながりながら，手・頭・心を動かし，よりよい未来を創造するための図工・美術教育の可能性をともに見出しましょう。

子どもと子どもをつなぐ

地域や社会をつなぐ

自分とつなぐ，他者とつなぐ

他教科とつなぐ

美術館とつなぐ

未来とつなぐ

材料，用具，環境とつなぐ

大会テーマ

TSUNAGU

～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～

あしたの
アート

T S U N A G U

学びをつなぐ
図工・美術教育の
可能性

**多様な他者との
つながり
影響を受け合う**

見方・考え方の広がり，深まり

大会テーマ

TSUNAGU

～学びをつなぐ図工・美術教育の可能性～

あしたの
アート

T S U N A G U

学びをつなぐ
図工・美術教育の
可能性

◇ 図工・美術の学びを
様々な「ひと・もの・こと」とつなげる手立て

◇ 学びの広がり，深まり，循環を創出する手立て

4 内容

(1) 1時間目「実践発表」

「TSUNAGU」をテーマに図工・美術科の学びを様々な「ひと・もの・こと」とつなげ，学びの広がりや循環を創出するための手立てや方策について，上・中・下越の代表が発表しました。

地区	氏名（所属）	学年	題材名
上越	寺田 朱実（上越市立吉川小）	小1	「にじいろスーパーマン」
中越	大橋 麻耶（長岡市立越路中）	中3	「未来のためにできること ～Tシャツの制作～」
下越	阿部 秀代（新潟市立曾野木小）	小6	「ここから見ると」



(2) 2時間目「造形五・十の市」

県内の図工・美術教育に携わる教職員の実践やネットワークが広がることを願い，平成29年の県美長岡大会に引き続き行いました。上・中・下越23名の教職員が「TSUNAGU」をキーワードに行った実践を持ち寄り，実践紹介ポスターや作品を通して，参会者と交流しながら発表しました。感想を述べたり，質問したり，チラシを集めたりして，市場を散策するように楽しみながら学びを深めました。



(3) 3時間目「パネルディスカッション～あしたのアート～」

新潟県出身・新進気鋭の3名のアーティストとともに，子どもの表現や授業について，参会者も一緒に考えました。「参加型パネルディスカッション」として，アーティストの考えと参会者がスマートフォンから入力した回答をスクリーン上でつなぎ，それをもとにトークを展開しました。参会者一人一人が，これからの図工・美術教育や明日の授業につながるヒントを見付けることができました。




参会者からは，「TSUNAGUというテーマと実践から，コミュニティを形成していく希望を感じ，刺激と気づきがたくさんあった」「図工・美術の実践を聞く機会は限られていて貴重。新しい視点で美術を捉えられた」「造形五・十の市は，実践者と直接交流しながら考えを深める機会になった。質問することで分からないことを教えてもらったのもよかった」「パネリストの話だけでなく，参加者の回答を可視化しながら進行する形式が新鮮だった」などの感想が多くあり，参加者のニーズに合った内容であったと考えています。今年度の成果と課題をもとに，今後の研修においても「学びをつなぐ図工・美術教育の可能性」について有意義な提案ができるよう，さらに研究を深めていきます。

1時間目 実践発表①

にじいろスーパーマン (小学1年 工作, 造形遊び)

上越市立吉川小学校 寺田 朱実

【大会テーマ「TSUNAGU」との関連】


 ところをつなぐ

小学校の図工であっても、アートである。アートは、私の中では、ところをつないでいくものである。自分自身の中で、また他者、世界と。活動(行為)でも、もの(作品)でもそこには必ず、「感じる何か」があると思う。そのコト、モノに対面したときに「感じる何か」を人と共有できることの喜びを子どもたちにも感じてほしいと思っている。そのために、人の本能に近い、楽しい、嬉しい、きれい…を感じさせることを大切に、気持ちを素直に話せる関係やその場の雰囲気、いい時間をみんなで過ごせる経験を積み重ねていくことが、「ところをつなぐ」手立てや方策になるのではないかと思う。そして、「ところをつなぐ」ことが、子どもたちの学びの広がりや深まりになり、図工を通して、人として生きる豊かさを手に入れることになるのではないだろうか。

1 実践の概要

令和5年度は、1年生10人とヤギ3頭と一緒に過ごした。10月から12月まで、ヤギの遊び場づくりを中心とした「にこにこランド」の活動を行った。「にこにこランド」は、ヤギを飼い始めた5月に、「ヤギさんのいるところをどうしたいか」ということを子どもたちと話し合ってきた生活科の活動名である。「にこにこランド」には、ヤギが歩いて渡る橋、自分たちで絵を描いた「にこにこテント」、色水遊びからつくった「にじいろ迷路」、そして「にじいろスーパーマンマント」があり、どれも生活科と図工が交じり合った活動になっている。

「にじいろスーパーマンマント」は、作品をつくっていくうちに、子どもたちから生まれた言葉である。作品が出来上がるにつれて、その作品で遊ぶ中で、自然とその名前が付いていった。

「にじいろスーパーマンマント」は、図工の教科書に載っている『ひらひらゆれて』『(工作)』が基になっている。図工の教科書を見て「にこにこランド」に使えるものは何だろうと、私が始めに提案した。そして、『ひらひらゆれて』なら、「外でも飾れて、きらきらしてよさそう」「いいねいいね」「賛成!」となり、つくることになった。「一人一人がつくって洗濯物にみたいに飾ろうね」とだけ話をしてスタートした。

【ねらい】 ○ 試行錯誤しながら、風に揺れる飾りをつくる時の感覚や行為を通して、いろいろな形や色、触った感じなどに気付く。(知識)

○ はさみ、のり、テープなどに十分に慣れるとともに、手や体全体の感覚などを働かせ、表したいことを基に表し方を工夫して表す。(技能)

【材 料】 大きなゴミ袋、スズランテープ、両面テープ、油性マジック、透明荷造りテープ

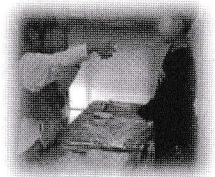
【展開と子どもの姿】

① 大きなゴミ袋の両端を、はさみで切って大きなビニール1枚にする。

大きなビニール袋を開くためにハサミで切ることは、子どもにとって難易度が高かった。それぞれ個性のある大きいビニール1枚になった。切るところを間違えてもあまり気にならないように声掛けした。

② 両面テープを使って、好きな色のスズランテープを選んで、好きな長さにしてビニールに貼る。

思い思いに、好きな色を選んで、好きな長さを切っていたが、初めはそんなに長くは切らなかった。一人で貼りにくいところには、「ヘルプ!」「手伝って!」と一緒に貼る姿が見られた。ヤギが落ちたビニールを食べるといけないので丁寧に両面テープで貼ることは確認した。



③ 「絵を描きたい子は、油性マジックで描いてもいいよ」と油性マジックを用意する。

油性マジックで、ビニールに描く感触を「楽しい〜」「気持ちいい〜」と言って、楽しむ子どもたち。確かに、油性マジックでビニールに描く感触は何とも言えない気持ちよさがある。「一緒に気持ちいいねえ〜」と楽しむ。そして、思い思いに好きなものを描いては、「先生、見てみて〜」と満足気に見せてきた。



- ④ ある程度、活動に満足してくると、マントのように背中につけ出す。

「にじいろスーパーマン！」と名前が付いて、みんなが背中に着けて楽しむ。

1人の子が、長いスズランテープがなびくことに気が付き、すごく長いスズランテープを付け出した。

- ⑤ 背中に着けると、長いスズランテープの方がカッコいい、面白いと気付く。

一人の子がマントのように着けて走り回る姿を見て、他の子も「自分もしたい」と走り出し、長くした方が風になびくと気が付き、長いスズランテープを付けていくことになった。

- ⑥ にこにこランドで飾るために、友達の商品とつなげるため、端にスズランテープのひもを付ける。

マントのように首に結べるようになり、どの子も満足してマントを着けて楽しみ始めた。

- ⑦ グラウンドに出て、マントを楽しむ。

晴れた強風の日。マントが出来上がった子どもの喜びのテンションは高く、「にじいろスーパーマンだ！」と、みんなでグラウンドに出ることにした。太陽の光に照らされて、どの子もキラキラ輝いて、きれいであった。にこにこランドに飾るには、ヤギがいるためスズランテープが取れないかが重要である。それを見るためにも試すことが必要であり、いい機会になった。結果、取れたものは少なく、マントは無事であり、みんなで一安心。「風で飛んでしまったビニールをヤギが食べてはいけない」とヤギへの意識からしっかりと貼っていたと思われる。

- ⑧ にこにこランドに飾る。

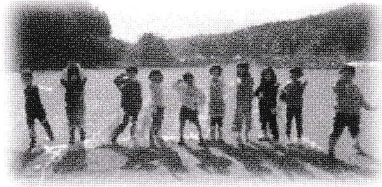
にこにこランドで行うイベントに合わせて飾ると、「わあ！」と歓声が上がり、大満足の子どもたちであった。風にひらひらする「にじいろスーパーマント」は、とてもきれいであった。中庭に吊り下げると、長すぎたスズランテープもあり、ヤギが食べるかもしれないと少し切ることになった。

2 成果と課題

「にじいろスーパーマント」は、造形遊びの要素もある活動になった。私としては、「きれいなものをつくって飾って満足だな」と思っていたが、自分の予想を超えて子どもたちは造形したもので楽しんでた。子どもたちが初めて「にじいろスーパーマン」になったとき、私は、身に着けている姿を見て「にじいろみのむしだね」と声を掛けたが、誰もものってこなかった。彼らにとっては、動き回ったことにより、「にじいろスーパーマン」はずれないものなのである。ちなみに、にこにこランドに飾るときには、自分たちが身に着けていないので「にじいろスーパーマント」になる。

大きなゴールに向かって、一つ一つを完成させていく子どもたちを見ることはとても楽しい。ものをつくることは自己選択の連続であるから、それぞれがそれぞれのゴールに向かって、ものをつくることに没頭できる時間をこれからもつくっていきたい。みんなでつくった「にこにこランド」は、イベントも行い、全校のみんなに見てもらうことができ、子どもたちは大満足の活動となった。

もの（作品）をつくるときには、たくさんの材料とたくさんの経験がつかめる時間を確保したい。繰り返し行うことで、上手になったり、いろいろなことを思い付いたりする。鑑賞についても、作品を見て文章で書くこともあるが、活動の中で友達のいいところを発見し真似したり、一緒に見合っ楽しんでることで、鑑賞している。子どもたちが一緒につくる中で、いろいろと刺激し合っていることがよく分かったので、その意味付けや鑑賞の行為を子どもに伝えていきたい。1年生なので求めていなかったが、見た目などにも興味をもたせ「もっと丁寧に切ろう、つけよう」などと思わせることができれば、技能的な力もさらに伸ばせるかもしれないと思う。



1時間目 実践発表②

未来のためにできること～Tシャツをデザインしよう～ (中学3年 デザイン)

長岡市立越路中学校 大橋 麻耶

【大会テーマ「TSUNAGU」との関係】



美術を通して自分と社会をつなぐ

SDGsをメインに現代社会が抱えている課題を仲間と共有し、さらに各自で掘り下げ、テーマを決めてTシャツを制作する。実現したいデザインに向けて、自ら技法や手順を決め、試行錯誤しながら制作活動を進める過程を通して、当事者として未来を考え、社会とのつながりを深めていくことを目指した。

1 実践の概要

社会や未来に目を向ける中学3年生の美術では、生徒に既習事項と新たな学びを活かして材料を工夫し、表現豊かにアイデアを形にしていく力を身に付けてほしい。

だが、これまでの実践において「未来のためにできること」という題材で絵画制作を行った際は、絵を描くことに苦手意識が強く、制作に消極的になる生徒がいることが課題であった。そこで、Tシャツをデザインするという表現に代えることで、主体性の向上を図った。アイデンティティの確立期にある中学生にとってファッションは大きな興味関心の対象である。また「自分が着る」＝「自分ごと」としても課題を捉えることができると考えた。さらに、使う技法の組み合わせによって単純にも複雑にも難易度を変えることができ、美術が苦手な生徒も得意な生徒も、共に



完成度の高い作品を制作することが可能であると考えた。

また、主体的な学びを実現するために、「テーマを決める」「技法を決める」「手順を決める」といった発想構想のプロセスで、自己決定していくよう働きかけた。制作手順はクロームブックの「オクリンク」で共有することで、同じ技法を使う生徒同士が相談しながら進めていく様子も見られた。

活動の終末は、完成作品を実際に着るファッションショー形式の鑑賞会を行い、互いの表現を認め合う時間を設けた。栃尾美術館「ながおかのこども作品展」でも展示させていただき、多くの来場者に鑑賞してもらう機会を得た。

<学習の流れ 全12時間>

自分 × 美術 × 社会

① 社会の課題と学習目標を確認する

社会の課題をクロームブックで調べ、グループで共有したり解決策を考えたりする

② 関心が深いテーマをさらに掘り下げて調べる

③ Tシャツのデザインのテーマを決定→アイデアスケッチ

④ 技法を紹介し、技法と手順を決める

※技法は2つ以上使用するよう伝える(難易度が上がり、思考力を養う題材になる)

例: 染め、絞り染め、防染、ステンシル、サン描画スクリーン、コラージュ、

そのほか縫製(他教科関連:家庭科)など、今までの学びも活用OK

教師から生徒への問い

・「デザインを見た人を共感させたり考えさせたり、人の感情を動かすには?」

・「世界中の人に伝わるデザインは?」

・「着た時の印象は?(平面から立体へ)」

⑤ それぞれの手順で制作する

⑥ 展示用にメッセージ入りのタグを作る

⑦ ファッションショーをして自己評価、相互評価

<準備したもの>

白いTシャツ (S, M, L, XL の希望をとり注文)

染色の材料, 用具

染料 (スカイブルー, ネイビーブルー, 黄, 赤, ピンク, 黒 ※混色も可), 塩, 輪ゴム
ビニール手袋, スポイト, バケツ, 防染インク, ポットの湯, (定着剤)

ステンシルの材料, 用具

布用インク (赤, 黄, 青, 黒, 白, バインダー ※混色も可)
ケント紙, A3 クリアファイル (中敷き用), スプレーのり
メラミンスポンジ, カッター, ハサミ

サン描画スクリーン材料, 用具

布用インク (ステンシルと同じもの), スクリーン, スクイジー
スクリーン枠標準判 (テトロン 180 メッシュ), サン描画乳剤
サン描画剤ペンタイプ, サン描画用洗い油
※そのほかの材料は生徒が持参



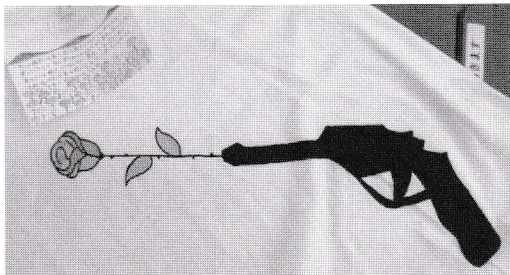
布用インク。透明感を出す場合は水を使わず、薄め剤のバインダーを加える

サン描画スクリーンとは…

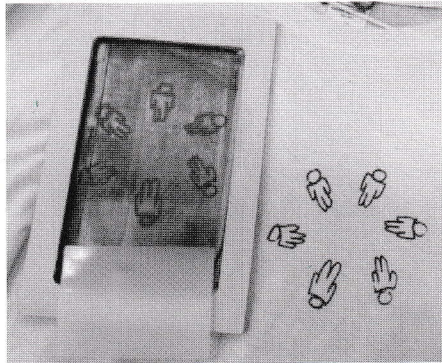
描いた部分そのまま版になる, シルクスクリーンプリントの中で最も簡単で安価な技法。ステンシルでは制作が難しい細かめのデザインの人におすすめ。スクリーン枠は乳剤を落したりテトロンを張り替えたりして, 再利用が可能。

新日本造形 サン描画スクリーン ※生徒も動画を視聴してやり方を習得

URL : http://www.snz-k.com/216400_silk-screen.html



銃の部分はステンシルで, 花はサン描画スクリーンを用いて最後に手彩色した



染色後, サン描画スクリーンで刷ったところ



絞り染めの後ステンシルをしている様子

2 成果と課題


最大の成果は, 生徒の主体性の向上である。制作前にTシャツを配布した時から, 「どんな色にしようかな」「裾を切ってもいいですか?」など, 既にアイデア出しはスタートしている。本題材は, さまざまな技法でのアプローチが可能であり, それぞれが自分のデザインに最適な技法や手順を選択し, 教え合いながら制作している様子が見られた。題材終了後の生徒の感想からは, 「社会の課題の多さに気づき, 自分のテーマについて深く考えた」という記述が多くみられた。一方で, 「デザイン性とメッセージ性の両方を考えるのが難しかった」と発想・構想での難しさを感じたという意見もあった。この題材の取組を通して, 実践者自身は美術が社会とつながる架け橋になり得ることを実感できた。

課題としては, 生徒が技法を深める準備と, 鑑賞のさらなる充実である。例えば染色にも多様な表現があり, 生徒が理解して試してみたいという意欲に応えられるような教師側の工夫と準備が必要だと感じた。制作した作品はファッションショー形式で鑑賞会を行った。DJを放送委員が担当し, 美術室でクラス単位の小ぢんまりとしたショーとなったが, 今後は, より達成感を味わい他者との交流が生まれるよう, 学年の実態に応じて鑑賞会の規模や演出を考えることも学習内容に盛り込み, 総合的な演出まで範囲を広げ, 工夫を凝らしたい。

1時間目 実践発表③

ここから見ると (小学6年 造形遊び)

新潟市立曾野木小学校 阿部 秀代

【大会テーマ「TSUNAGU」との関連】  子どもと子どもをつなぐ

本題材は、身近にある場所の奥行きや特徴を生かし、その場所に来た人を楽しませるような仕掛け（トリックアート）をつくる活動を通して、感じ取った身近な場所のよさや特徴を基に、造形的な活動や構成を発想する力を育てることができる題材です。場所の奥行きを生かして、ある場所から見ると形が繋がって見えるように、グループの仲間と協力して位置や大きさを試しながらつくる必要があります。その過程で対話生まれ、子どもと子どもがつながります。対話を通して、自分が気付かなかった表現があることに気づき、見方や感じ方を深めていく姿を期待しました。また、全校のみんなを楽しませるという相手意識・目的意識をもちながら、表現活動に取り組んでいくことを通して、6年生と全校のみんなや職員がつながります。さらに、全校のみんなや職員に見てもらうことで、自分たちの作品でみんなを楽しませることができた実感させ、表現する喜びを味わわせたいと考えました。

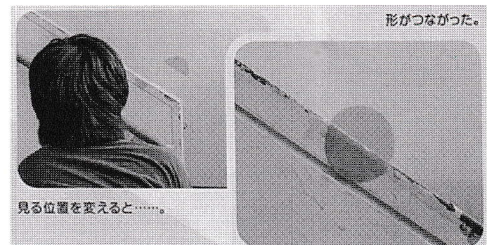
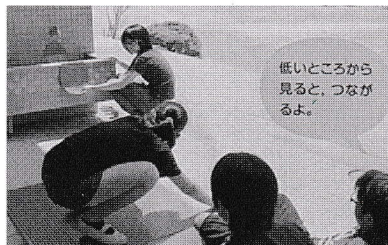
1 実践の概要

第1時 トリックアートの仕掛けを理解し、グループで協力して試しの作品をつくる。

導入として、場所の奥行きを生かした作品について、教科書の画像や実際の作品を基にトリックの仕掛けを見つけました。

トリックアートの仕掛け

- ・ある場所から見ると形が繋がって見える
- ・場所と関連したもの

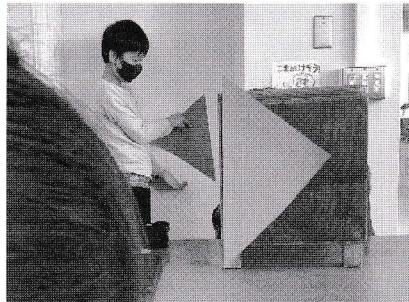


※日本文教出版「図画工作5・6下」より

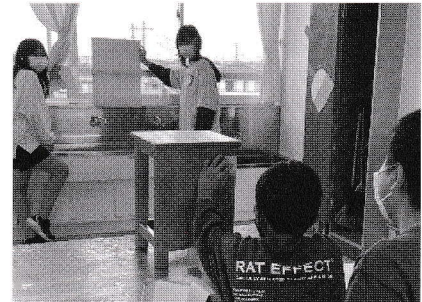
画像や実際の作品から見つけた「ある視点から見ると形が繋がって一つの物に見える」というトリックアートの仕掛けを使って、グループで試しの作品を図工室で作ることにしました。この仕掛けをつくるには、グループで協力し、奥行きのある離れた場所の物が、一つに見えるようにするにはどうすればいいか、意見を出し合いながら試行錯誤しなければなりません。始め、子どもたちは、一つの物を二つに分けて、手前と奥に貼りました。しかしそのやり方では、遠近感があるために、手前のものが大きく、奥のものが小さく見え、つながらないことに気づきました。実際に試していく中で、対話生まれ、対話を通して、奥行きがあるものをつながって見えるようにするには、手前よりも奥のものを大きくしなければならぬことに気付く姿が見られました。



導入でトリックアートの仕掛けを見つけました。



試しの作品づくりの様子。始めは大きさが全く合いませんでした。

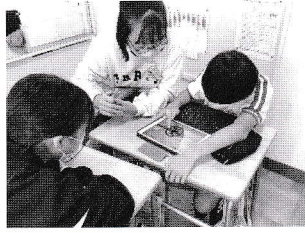


第2時 グループで場所を選び、アイデアを出し合い、つくるものを決める。

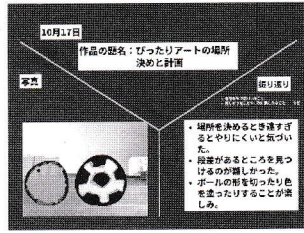
グループで校舎内から奥行きがある場所を見つけ、タブレットで写真を撮り、トリックアートを作る場所を選びました。場所を決定してから、「○場所に関連したもの○単純な形で使う色は3色まで」という条件を提示しました。子どもたちは、どんなものを作るかアイデアを出し合い、写真に書き込みました。



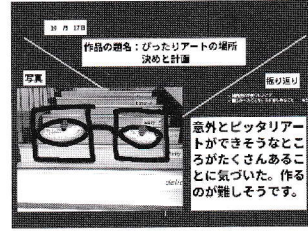
場所選びの様子。



写真にアイデアを書き込みました。



デジタルポートフォリオとして振り返りを蓄積しました。



第3・4時 材料を使い、仲間と協力して、位置や大きさを合わせながらトリックアートをつくる。

グループで選んだ場所に移動し、作品をつくりました。手前と奥に分かれて、ぴったり合うように声を掛け合いながらつくる姿が見られました。ここでは、第1時でトリックアートのつくり方を学習したことが大いに役立っていました。グループで協力し、対話をしながらトリックアートを完成させる姿が見られました。



作品づくりの様子。



大きさや位置がぴったり合うように、相談しながらつくっています。



第5時 トリックアートを鑑賞する。トリックアートを全校に見てもらおう。

互いの作品を見合い、よさや工夫を見つけ、造形的な見方や感じ方を深めていきました。また、全校のみんなに楽しんでもらうために、ポスターや昼の放送で呼び掛けました。感想ポストを設置したことで、全校のみんなや先生方からトリックアートの感想をたくさんもらいました。「学校が美術館になったみたいで楽しかった。」「トリックアートを見付けるのが楽しかった。」「すごく上手に出来ていてびっくりした。」などの感想をもらい、表現する喜びや達成感を味わうことができました。



全校児童がトリックアートを楽しんで見えています。



感想をもらい嬉しそうです。

2 成果と課題

対話を通して造形的な見方や考え方を深めることを研究主題として、この授業を考えました。「ある視点から見ると奥行きのある物が一つの物に見える」というトリックアートの仕掛けをつくるには、グループで協力することが必要です。教師側が設定しなくても、トリックアートをつくりながら自然と対話が生まれる、子どもと子どもをつなぐのに適した題材でした。また、校内で子どもが場所を選んでつくることで、学級の枠を超えて全校のみんなや職員に楽しんでもらうことができ、6年生にとって大変充実した活動になりました。

最後に、この実践をまとめたものを「新潟教育アート展 活動部門」に出品し、グランプリを受賞することができました。多くの方にこの実践を見ていただき、造形活動のよさや楽しさを発信することにもつながったのではないかと思います。

2時間目 造形五・十の市

■ 発表者の先生方に感謝

造形五・十の市は平成 29 年の県美大会を中越美術教育研究会が運営したときに行われました。今回はその 2 回目となりました。前回は長岡リリックホールで隣接する複数の練習場で造形五・十の市を開催しましたが、今回は見附市文化ホールアルカディアのホワイエで一堂に会して行いました。吹き抜けの 2 階から発表の様子を伺うと、まさに市場の賑わいをほうふつとさせる熱気があり、発表者の皆さんの思いと図工・美術教育の情報を得たいと思う参会の皆さんの思いの強さを感じました。

まずもって、実践紹介をしていただき活気あふれる場を創出していただいた 23 名の先生方に心から感謝したいと思います。

■ 発表の概要

造形五・十の市を振り返り、まず、23 名の先生方のそれぞれの実践のタイトルを、ポスターから抜き出して紹介したいと思います。

1. うごけ！ほく・わたしのキャラクター ～ICT で未来をつなぐ～
新潟・牡丹山小・鈴木美紗先生
2. 身近な美術作品のよさや面白さを感じ取るための ことばをつなぐ鑑賞教育活動 新潟・女池小・長谷川美鈴先生
3. まちや人とつながる 経験を生かして学をつなぐ 村上・村上小・横山拓貴先生
4. 押し曲を「水墨画」で表す ～自分と曲との関りを考えながら～
新潟・濁川中・石井隆浩先生
5. 絵画×音楽 創作でつながるふたつの教科 新潟・附属新潟中・丸山広大先生
6. 造形遊びから見える子どもの“つなぐ” 柏崎・二田小・大矢奈津子先生
7. すなとつちとなかよし ともだちと 砂や土の触感を十分に味わい 他者ととともに活動に没頭して 糸魚川・糸魚川小・宮澤諒也先生
8. からふるアートプロジェクト 上越・大町小・加藤啓先生
9. アートカードゲーム つなぐ 上越・直江津中・金沢和明先生
10. 「生き生きとした動物の姿」を工夫して表し、周りの仲間とつながろう 上越・城北中・丸山葉子先生
11. その名画の続きは… 長岡・川崎東小・堀田祐嗣先生
12. 小学生と中学生をつなぐ 三条嵐南学園・小中コラージュアート大作戦 三条・嵐南小・樋浦吉人先生
13. ICT を活用して「子ども」と「教室」をつなぐ 三条・嵐南小・安井次郎先生
14. TSUNAGU ×こだわりの 1 枚 小千谷・東山小・富樫亜紀先生
15. つないでかざって ネットワールド 見附・見附小・山本啓亮先生
16. Sekistagram 全校で気軽につながる写真鑑賞 長岡・関原中・永井愛先生
17. 成長する自分とつなぐ 長岡・大島中・竹田祉薫先生
18. 鑑賞者とアート作品を TSUNAGU 長岡・旭岡中・荒木広明先生
19. 他教科と美術を和歌でつなぐ 三条・第二中 児玉季恵先生



20. 小出中学校アートのチカラ！3cm×3cm PIECE は→世界の PEACE
魚沼・小出中・井口かほり先生
21. 「自然科学」、「数学」と TSUNAGU 「理科」、「光学」と TSUNAGU 「過去の名作」と TSUNAGU 「文学作品＜俳句や短歌、小説など＞」
と TSUNAGU 中越高・北村和則先生
22. 巨大オブジェで校内を飾ろう！絵本を作ろう 見附高・田中幸男先生
23. あそび・本物の体験 造形活動～学びと育ち 恵和こども園・伊藤祐介先生

こうして、今、タイトルを目にするだけでも、造形遊びや鑑賞の実践、授業から飛び出して学校全体や地域とつながっていく実践など、様々な実践が紹介されたことに気づき、研究大会が終わった今でもワクワク感が湧きあがってきます。

■ 造形五・十の市が目指したもの

今回の造形五・十の市を企画するにあたり、研究部会場で担当として次のような方向性を私案・草案として示しました。

- ・造形教育に携わる教員が、日ごろの図工美術の授業等について対話・交流ができる機会とする。
- ・大会テーマ「TSUNAGU」に即した内容でありつつ、研究発表（授業公開・協議会）とは差別化を図ったものとする。

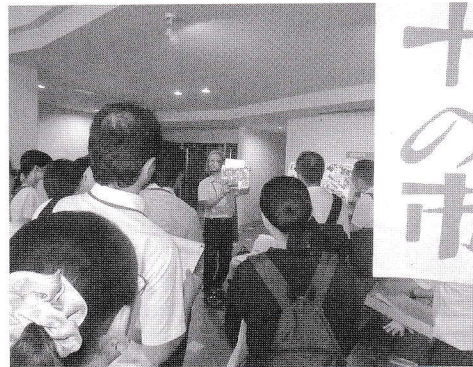
本大会に向けて図工・美術教育に携わる先生方がどのようなモチベーションをもっているのかを想像してみたときに、先生方が図工・美術について何か話をしたい、聞きたい、と思う気持ちを大切にしたいと思いました。そして、大会の中軸となる研究発表だけでは収まり切れない「交流したい」という先生方の気持ち、必要感に応えるためにも、差別化という言葉が登場させたように思います。このように、運営側においては、研究発表で学び、造形五・十の市で交流するというかたちを当初からイメージしていました。この方向性は、造形五・十の市の1回目の開催のときから、基本的に変わっていないように思います。

■ 図工・美術教育に携わる先生方の交流のこれから

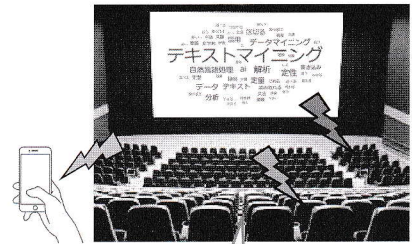
昨今、どの教科においても研修の時間の確保がとても難しくなっているように思います。また、そもそも図工・美術教育に携わる先生方の数も児童生徒数の減少に伴い少なくなってきたり、中学校・高等学校においては、学校に1人しか美術科担当教師がいない場合がほとんどであったりして、校内で美術談義をできる機会も少ないのだらうと推察します。

こうした中で、図工・美術教育の研究大会が果たす役割は、先生方の指導力の向上はもとより、私たち自身が集まり交流をすることでつながりを深めていくことであると感じます。そして、今大会のように、これからも図工・美術教育に携わる先生方が、求めて集まり、図工・美術教育について好んで語り合うようになることを期待しています。

〈文責：弥彦中学校 清水 康一〉



3時間目 パネルディスカッション「あしたのアート」



自然言語処理の技術により単語や文節に分割して、その出現頻度や相関関係を分析し、有益な情報を採り出す技術。

新潟県出身・新進気鋭の3名のアーティストをパネリストに迎え、子どもの作品や授業について考えるパネルディスカッションを企画。パネリストと来場者の間で双方向の意見交流ができるよう、テキストマイニングを用いた。提示された質問に対して、来場者が投稿した回答をスクリーンに映し出すことで、会場の全員が同時に思考を巡らせることができた。

パネリストは、スクリーン上から自身の考えに触れる言葉を見付け、それをもとにトークを展開。来場者はそれぞれがもつ思いを繋ぎ、これからの授業や生き方についてヒントを見付けることができた。

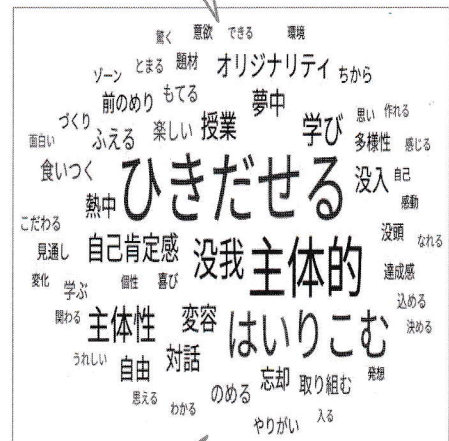
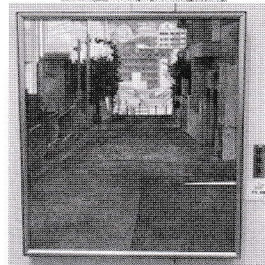
本田さんのお話は、互いに敬意をもち、みんながよりよく生きていくウェルビーイングの視点があり、アートに限らない生き方のヒントとなった。今井さんの、「子どもたちには、大人の価値観に捕らわれることなく、自分の表現ができる場を設定してほしい。そして、裸の心で制作された子どもの作品は全てよい作品である。子どもの思いを受け止め、作品を大切にしたい。」という考えは、深く共感できるものであった。加治さんは、本大会が初参加。夢を叶えるには資金が必要と率直に語り、お金を得るには人との良好な関係の構築が必要であると述べた。3名のアーティストの方々には人望の厚さが伺われ、今後夢を見させてくれる存在であると感じた。

【来場者の感想】スクリーンの単語からは、授業者が子どもに寄り添って授業を展開しようとする、熱い思いが伝わってくる。アーティストの回答と繋がる言葉があり、共感することで勇気もてた。

日本画家 本田 貴哉 さん

1994年生まれ・長岡市出身。金沢美術工芸大学修士課程修了後、地元の長岡を中心に活動。日常の風景の瞬間を切り取った構図からは、地元の人々の気配や景色の静かさが入り混じっている。長岡や学生時代を過ごした金沢の風景を中心に、昆虫や花など身近なものを描いている。

〈主な活動〉院展に出品（現在、日本美術院院友）第19回福知山市佐藤太清賞公募美術展・日本画の部 佐藤太清賞受賞（19年）、個展「日々の輪郭」（ギャラリーみつげ・23年）、新潟県美術展覧会 奨励賞受賞（3回）、県展賞受賞（24年）



来場者への質問「授業で大切にしていることは？」

質問1：「子どもにとって、いい授業とは？」

〈本田さんの回答〉「生徒が新たな気付きを得ることで 見える世界が広がる授業」

学生時代、大学にはカーデザインを学ぶ人や器を作る人、居住空間をデザインする人などいろいろなジャンルを学んでいる人がいた。今まで出会わなかったクリエイティブな世界を目の当たりにし、自分の世界の見え方が変わったような気がした。そこで初めて、世の中のものみな人が手掛けてできていることを実感した。それは、その人たちが考える姿やつくり出す場面を実際に見た経験が大きいように思う。

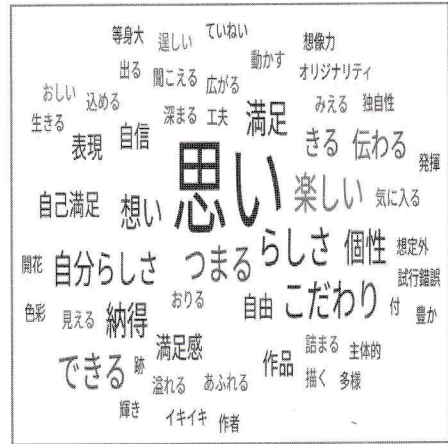
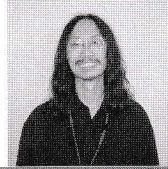
新たな出会いや気付きは、自身が学んだ事柄が世の中の見えていなかった世界とリンクすることから始まるのだと思う。そして、初めて面白さや興味といった自発的な気持ちが出てくるのではないかな。

授業は、創作の喜びを育むことができる。そして、授業では、実際に人が考えてつくり出す場面や人が手掛ける様子などを知ることで、自身の身近に美術があることが実感できる。冒頭に述べた「見える世界が広がるような授業」は、生徒の新たな好き・得意・興味に出会うきっかけになるのではと思う。

現代美術家 今井 翔太 さん

1996年生まれ・長岡市出身。新潟大学教育学部学校教員養成課程美術教育専修卒業。アイルランド留学を経て現在は新潟を拠点に活動。絵画のみならず、アートプロジェクトやインスタレーション、写真、漫画、アニメーション、音楽プロデュースを手掛けるなど表現領域は多岐にわたる。

〈主な活動〉「Telu Telu Boy - 明日はきっといい天気 - 展」(21年), 「明日はきっといい天気プロジェクト展」(アオーレ長岡・22年), 「ごみ袋のごちゃ - 地球の表紙をめくる - 展」(23年), 感謝系Vtuber 良寛さん (24年) ラジオ「アートのミカタ」好評配信中。



質問2: 「子どものいい作品とは?」

〈今井さんの回答〉「子どもたちが自分の思いを抑圧されず 裸になってアート体験をした表れ」

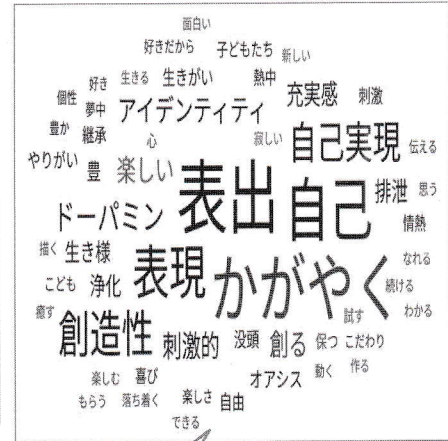
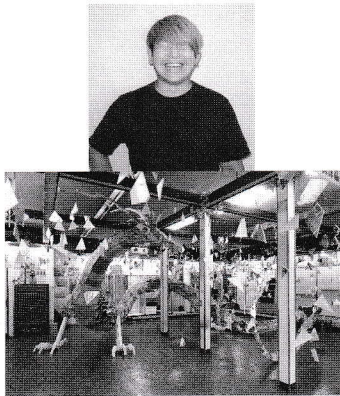
大前提として、そんなものはない。子どもたちから自発的に出てきたもの全てが素晴らしい。自発的とは、あるがままに世界を見て、自分の思いを抑圧せず創造すること。他者に抑圧された作品は好ましくない。家庭、学校社会、いろいろあると思うけれど、それを少しでも取り除いて、創造できる環境作りをするのが先生の役目だと考える。

例えば、子どもは桃、大人はイガグリ。桃はとてもデリケート。実が柔らかい上に皮が薄く、少しの衝撃で茶色く変色してしまう。皮を剥くのも絶妙な手加減が必要。大人が無理に桃の皮を剥こうとすると、棘が実まで傷つけてしまう。イガグリは、剥いたら実が出てくるけど、実は少なく捨ててしまう。イガグリには知識や偏見といったトゲがある。それは自身や関係を守るために身につけたもの。イガグリは、種を食べるもの。桃は、人それぞれ好みはあるが、色んな桃があっいい。色んな桃の存在を大切にしてほしい。

廃材再生師 加治 聖哉 さん

1996年生まれ・村上市出身。公立大学法人長岡造形大学美術工芸学科卒業。大学在学中より多くの地域に作品を提供。大学卒業後は村上隆のスタジオ、カイカイキキを経て、廃材を用い原寸大の動物を創るアーティストとして独立。長岡市栃尾を拠点に活動中。

〈主な活動〉大地の芸術祭 2022「廃材水族館」(龍ヶ窪・津南町), 地域おこし協力隊(杜々の森・長岡市栃尾), 中国アートフェア「和気団楽」作品展示, 大地の芸術祭 2024「思い出の在り方」出展



来場者への質問「造形教育を続けている理由は?」

質問3: 「アートを続けている理由は?」

〈加治さんの回答〉「廃材の可能性を広める・作ることが好き・お金を得るため」

1つ目は、世の中、特に子どもたちに廃材の可能性を知ってもらうため。私の場合は木材の廃材をアート作品にしているが、あなたの場合は何で何を成し遂げるか、考えてもらえるきっかけになればと思い、活動している。

2つ目は、作ることが好きだから。幼少期から作ることが大好きで、何か作っては周りに見せて褒めてもらったという成功体験のようなものが、今でも原動力になっていると思う。

3つ目は、お金を得るため。お金があれば、子どもたちに可能性を伝えることも、好きなことを続けることもできる。いま、大人として、社会の中で生きていくのにお金は必要なもので、大好きなものづくりをするために、自分にできること(ものづくり)でお金を得て、アートを続けている。

3名のパネリストと話すことで、目の前の子どもたちも、十数年後には現代の社会を興す若者へと成長することを実感した。よりよい授業を日々つくり、積み重ねていきたいと決意を新たにすることができた。

〈文責: 旭小学校 鯉淵 紀美子〉

第63回 関東甲信越静地区造形教育研究大会 茨城大会における実践報告

多様な活動を生み出し技能の発見・自覚を促す造形遊び



見附市立見附小学校 山本 啓亮

1 はじめに

変化が激しいこれからの社会において、変化に対処する受け身の姿勢ではなく、人間ならではの感性を働かせて社会や人生、生活をより豊かにしていくような姿勢の子どもたちを育みたい。個別最適な学びと協働的な学びを意識し、図画工作科の強みを生かして造形遊びを実践した。

2 児童の実態と実践の概要

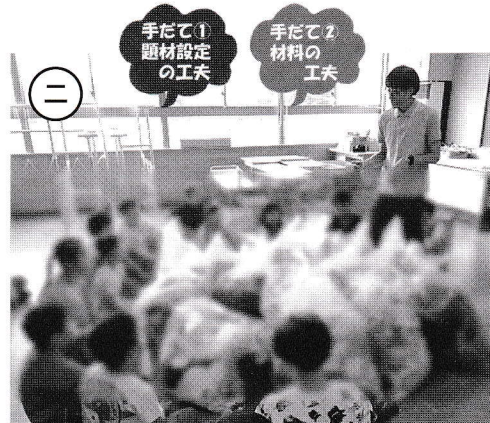
見附小学校4年生は、図画工作科への意欲が非常に高いと感じる。上手下手にとられずに、自信をもって表現できる児童が多い。造形遊びの経験はあまり多くないとのことだった。

私は、学習指導要領の造形遊びの目標に則り、「材料・用具の扱い方を生かし、組み合わせたり、つないだり…様々な活動を手や体全体を働かせて創造的につくる／表すことができる。」ことをねらいとした。さらに、タブレット端末を利用して記録や振り返りを行い、児童が自身の学びを自覚できることを目指した。実践は以下の二つである。

題材名	つんでならべて 紙紙紙コップ	つなげてかざって ネットワールド
素 材	・紙コップ 5000 個	・ニットの端材（見附市の特産） ・紙紐、ラッピングタイなど
場 所	・図工室（教室2つ分の広さ）周辺 （机や椅子などもあり、活動の幅が広がることを期待した。）	・教室、隣の空き教室、教室前の多目的スペース 周辺
時 間	・40 分間	・60 分間
手だて	手だて① 題材設定の工夫（表現意欲が高まる題材設定，材料との出会いの工夫） 手だて② 材料の工夫（試行錯誤ができる材料，材料の量を確保すること） 手だて③ 繰り返し試し，生み出すことのできる時間と場の設定 手だて④ 記録と振り返り（タブレットタイム）で自他の活動から技能の発見や自覚を促す	

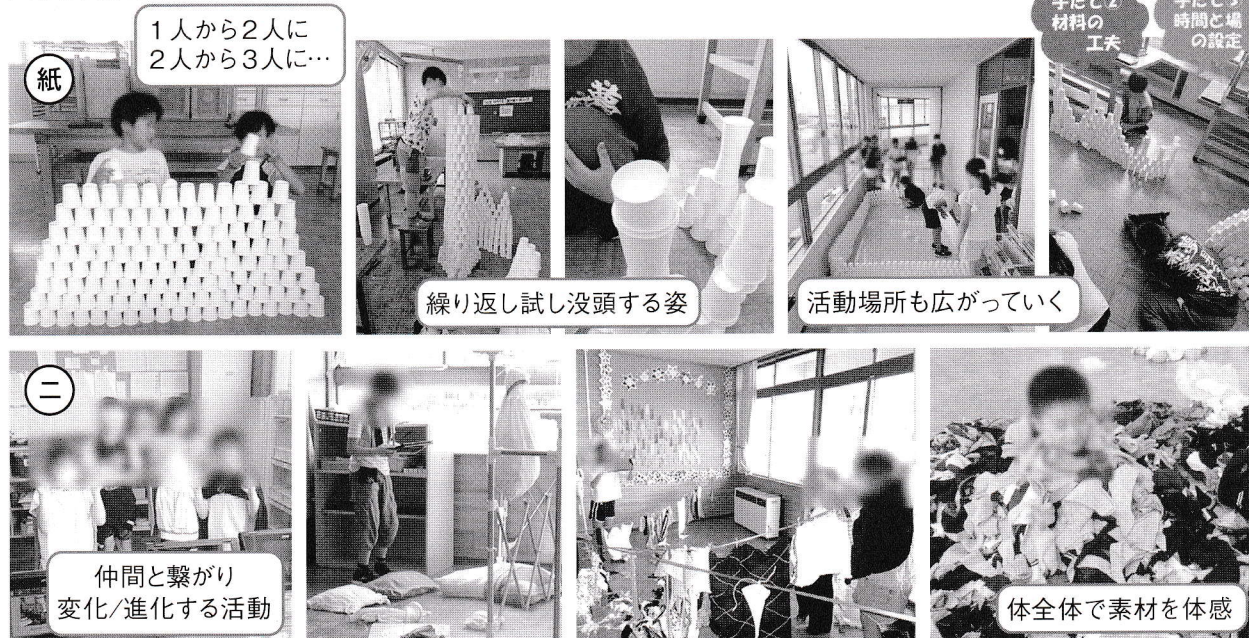
3 実践の実際

(1) 導入場面



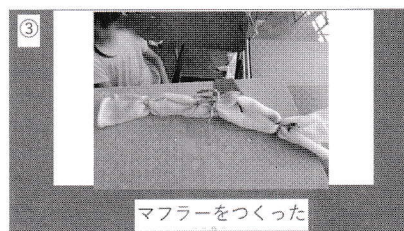
導入場面では、あらかじめ別の教室に材料を大量に用意しておき出会うなど、インパクトのある「素材との出会い」を演出した。また、素材に触れさせ、「素材感」や「どんなことができるか」を発問し、児童の考えを表出・共有することで、学習課題や題材名に繋げ、活動を誘発することを意識した。

(2) 展開場面



(3) 終末場面

終末場面では、どちらの実践でも各々がタブレットで活動の「変化/進化」をまとめた。A児からは、活動が次々に変容していったことがよくわかる。活動に自信をもって価値付けし、仲間と共有して認め合い、成長を自覚することができた。また、活動中の児童の「思い」や「願い」を知ることができ、指導者側からの評価や価値付けにも役立った。



【ふりかえり】
作品の変化/進化、心に残ったこと…

ニットでマフラーや、いろいろなものをはりがねと、糸でつくれることにおどろきました。みんなで協力して作れて楽しかったです。

タブレットによるA児の記録・振り返り

4 おわりに

(1) 成果

① 素材のよさ

紙コップは造形が簡単であること、スクラップ&ビルドができること。ニットの端材は、身近で親しみのある地域素材であること、形の色が多様であることがよさであった。両方とも量の確保ができ、体全体で素材に触れながら、仲間と関わって多様な活動ができた。

② タブレットタイムによる記録・振り返り

記録や振り返りが、学びの発見・自覚につながった。みんなでよさに気付いたり、自身の活動を変化させるきっかけになったりした。

(2) 課題

活動に「場所の必然性」があまり感じられなかったことである。今後は導入で、場所のよさについても共有し、さらに多様で幅のある活動に繋げていきたい。

『第30回 中越教職員美術展2025』について

中越教職員美術展 実行委員長 高橋 淳一



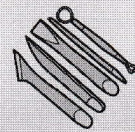
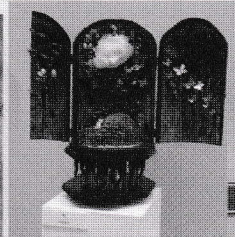
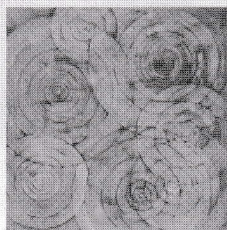
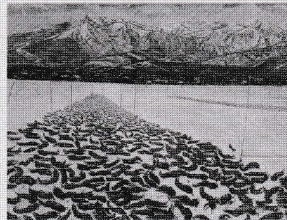
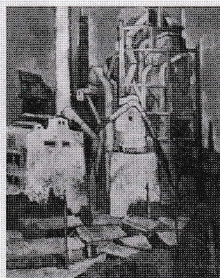
教職員美術展が始まり、今回で30回目という節目を迎えます。この記念すべき回に合わせて、次のような理由から開催の時期を変更いたします。

これまで、1月下旬～2月初旬のあたりに開催しておりましたが、厳寒期ということもあり、出品者や役員の交通面での負担、冬期間の来場者数の減少等の課題がありました。そこで暖かい時期に変更できないかという意見が寄せられる中、令和3年に長岡市立中央図書館が改修工事となりました。会場としていた、図書館2階の長岡市美術センターが使用できないため開催時期を一時的に5月に移して開催したところ、出品者からご好評いただくとともに、来館の多い時期のため来場者の増加にもつながりました。

この実績に基づき、第30回展を機に5月開催に踏み切ることになりました。ポスターも、下に示したようなデザイン(案)にリニューアルいたします。今年度に制作した作品を中心に、春先までに制作する新作まで募集いたします。これまでと同様に素敵な作品がたくさん集まることを楽しみにしております。

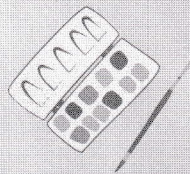
第30回 中越教職員美術展

2025



入場無料

令和7年5月15日(木)～5月18日(日)
 午前10時～午後5時まで(18日は午後3時まで)
 長岡市美術センター(長岡市中央図書館2階)
 長岡市学校町1丁目2番2号
 〈主催〉 新潟県中越美術教育研究会
 〈後援〉 長岡市教育委員会
 新潟日报社
 一般財団法人新潟県教職員厚生財団
 公益財団法人日本教育公務員弘済会新潟支部



〈事務局〉長岡市立上組小学校内中越教職員美術展2025 実行委員会 事務局
 〒940-1142 長岡市豊詰町 227 TEL 0258-22-0959